

富士川游・呉秀三両先生の間

——友情と医学史探究——

岡田靖雄

富士川英郎先生ならびにご出席の皆様。富士川游先生の没後五〇年というふかく記念すべき時に報告の機会をあたえられたことは、たいへんな光栄であります。呉秀三先生は富士川先生の生涯の親友であっただけに、この光栄はたいへんにおもく感じられます。ともうしましても、あたらしい資料にあたる、あるいは、まえにつかつた資料をもう一度検討しなおすというまでの時間もなくて、呉秀三先生伝（『呉秀三 その生涯と業績』思文閣出版、京都、一九八二年）にかいたものの抜萃にちかい内容になることをお詫びしなくてはなりません。

一

富士川先生・呉先生の生涯についてはその概略を皆様よくご承知のことと存じます。資料一に両先生の生涯をならべてみました。富士川先生は広島県沼田郡の生まれ、呉先生は江戸青山ですが芸州支藩下屋敷にうまれております。父君はともに医師。生年はおなじく一八六五年で、呉先生が三か月ほどはやくうまれておいでです。呉先生は幼時のほぼ五年間を広島県でくらし、また東京にもどっており、そのうち富士川先生が医学校をおえて上京され、両先生がはじめてあったの

年	富士川 游	吳 秀三
18- 65 (慶応1) 67 (慶応3) 72 (明治5) 79 (明治12) 87 (明治20)	<p>芸州にうまる (6・4—旧5・11)</p> <p>父雪を中心に奨進医会組織さる</p> <p>広島県広島医学校卒、上京、中外医事新報社に</p>	<p>江戸青山芸州支藩邸にうまる (3・14—旧2・17)</p> <p>一家広島県にうつる</p> <p>一家東京にうつる</p>
(I) 88 (明治21) 90 (明治23) 92 (明治25) 95 (明治28) 96 (明治29)	<p>△この年末か翌年はやくあいしる▽</p> <p>—医科大学卒業</p> <p>△『中外醫事新報』に交互に医人伝をかきはじめる▽</p> <p>△先哲祭 (3・4)▽</p> <p>△医史社をおこす、増田知正との共選『日本産科叢書』▽</p> <p>△シーボルト記念祭、種痘記念祭▽</p> <p>△芸備医学会創立▽</p>	<p>医科大学助教授 (『志望ヲ編史ニ絶』つ)</p> <p>ヨーロッパ留学</p>
(II) 96 (明治29) 97 (明治30) 98 (明治31) 99 (明治32) 00 (明治33)	<p>ヨーロッパ留学</p> <p>婦国、中洲養生院医長</p>	<p>婦国、医科大学教授、巢鴨病院医長 (↓院長)</p> <p>日本神経学会創立</p>
01 (明治34) 02 (明治35) 04 (明治37) 05 (明治38)	<p>日本神経学会評議員、日本児童研究会創立</p> <p>『日本醫學史』</p> <p>△土肥慶藏との共選『日本醫學叢書』(第二巻は翌年)▽</p>	

からかえられるまでで、この間に富士川先生も呉先生の翌年一八九八年にヨーロッパ留学にたたれています。しかも富士川先生がヨーロッパで専攻されたもののなかに神経学があったことは注目すべきです。

第Ⅲ期は、両先生がそれぞれの専門分野での仕事を精力的に展開した時期です。富士川先生は一九〇四年(明治三七年)に主著である『日本醫學史』をだされ、また一九一〇年には中洲養生院院長をやめられました、——ここで先生は歴史学を中心とする仕事に専念されることになったといえましょう。また呉先生は帰国すると東京帝国大学医科大学教授および東京府巢鴨病院院長となって、精神病学の教育・実践・研究・啓蒙の分野ではげしく活動されました。この時期の後半になると、呉先生は医学史の面にまたかなりの力をそがれるようになります。第Ⅲ期の終わりは、日本医史学会創立の直前としましたが、呉先生が教授・院長を退官・退職された時点とすることもできましょう。そして第Ⅳ期は、日本医史学会創立から呉先生の没年までになります。

このようにみますと、両先生の歩みに平行する面のおおいことがよくおわかりのことと存じます。

一

さて、両先生がであった頃については、まえにも報告いたしました(「呉秀三・富士川游両先生がであった頃——わが国医学史の濫觴をさぐる——」『日本醫史學雜誌』第二七卷第四号、一九八一年)が、ここでもう一度ふりかえらせていただきます。

まずこの出会いについての証言をききましょう。呉先生は富士川先生の「日本醫學史の序」(富士川游『日本醫學史』裳華房、東京、一九〇四年)に、

二十余年前余が富士川君と初めて交を締んだ頃は余が医学を修めることに心を定めてより暫時の後であつたから此の如き趣味を抱いて居ることがまだ濃く殷んであつた故森川に釘店に君が余の下宿を訪ひ来つた頃に嗜好が似て帰趣が

同じで心意気が相ひ投合したのも当然である

とかいております。土肥慶藏先生はおなじく「日本醫學史序」に、

往年余ノ学生タリシ時嘗テ呉芳溪ト居ヲ同ウス芳溪好ミテ医史ヲ講ジ余モ亦我國医史ノ欠ゲテ備ハラザルヲ歎ジ遂ニ二人胥謀リ起テ之ヲ修メントス一日客アリ来リテ芳溪ヲ訪フ举止端正風采素樸頗ル古君子ノ風アリ芳溪ト与ニ和漢医学ノ事ヲ談ジ其言鑿鑿トシテ証拠アリ余私カニ其尋常ノ人物ニアザルヲ信ズ既ニシテ芳溪顧ミテ客ヲ余ニ介ス余是ニ於テ始メテ富士川子長ト相識ルヲ得タリ因テ鼎坐俱ニ志ヲ語り更ノ移ルヲ覚エズ

とのべています。ここにおわかい富士川先生の姿がうかびあがってきます。富士川先生は「故醫學博士呉秀三君」(『藝備醫事』第四二八号、一九三二年)に、

私が故博士と相知つたときは、故博士が大学に入りて医学を修められてからまだ間もない頃でありましたが、私も医史を修むることを志して居つたので、話がよく合ひまして、私はしばしば故博士の下宿して居られた本郷釘店の本間をたづねたのであります。

とかたっておられます。そこで、森川町、本郷釘店の本間方、そして呉・土肥両先生が同宿していたところがうかびあがりません。

そして呉先生は「土肥慶藏君を憶ふ」(『體性』第一七卷第六号、一九三一年)に、下宿のことをこうかいております。

明治二十年頃には君と同宿して数ヶ月西片町の石原と云ふ人の二階に住つて居たことがある。此家に私は君が何かの事故で去つた後は、今は病理学の大家である藤浪鑑君と同宿して居た。石原が白山前に移つて、兩人ともついて引越し、それから森川町の下宿へ二人で又相宿して居た。

つまり、呉・土肥両先生は西片町の石原方に同宿していたのです。

これらの時期はいつごろか。呉先生の第二男吳章二様が医学文化館に寄託されている資料A 243に、呉先生が呉家由来か

ら一八九一年五月二日にいたる動静をしるした日乗があります。わたしは森林太郎の『自紀材料』にならない、それを『自紀資料一』とよんでおります。一八八八年（明治二十一年）のところに「十一月末森川町五拾壹番地野口氏ニ移ル」とあります。つづいて「二十二年一月廿五日西片町十番地石原氏ニ移ル」とあり、また欄外には「非日本食論」、ついで欄内に「三月医学統計論訳成」とあります。「非日本食論」は、いうまでもなく森林太郎の『非日本食論將失其根據』に呉先生がかいた序文のことで、一八八九年のほうにかいてありますが、前年の一二月一四日に出版されています。またこの「醫學統計論」は森林太郎の統計論争のもとになったものであります。

つぎのペイジは和紙にインク書きのためにじんできず、ひどくよみにくいのですが、「四月廿八日石渡慶藏其郷□□□□ニ移ル」とあり、つづいて「四月卅日名古屋人藤浪鑑太郎来寓」とあります。土肥先生が叔父土肥玄朴の養子になられたのはこの年の八月二〇日のことで、このときはまだ石渡姓でした。藤浪鑑太郎とあるのは藤浪鑑で、呉先生よりは五歳下でした、そして土肥先生とはすでに親交があったのです。

一八八九年の終わり頃のところは、「白山前町ニ移ル」とありますが、日がはいっておられません。白山前町については、『東京醫學會雜誌』第三卷第二一号に「小生義今般東京府士族中野の籍に入り且つ姓を中野と改め当分小石川区白山前町四十八番地石原方に寓居す」という広告が中野（呉）秀三の名でだされています（この広告の存在は新潟の小関恒雄先生からおしえていただきました）。すると白山前町にうつったのは一〇月中でしょうか。

藤浪の追悼講演（『呉秀三小傳』呉博士伝記編纂会、東京、一九三三年）では、

年は忘れまされども私が未だ高等学校に居つた時分、呉秀三君が大学の三年か四年の学生であつた頃のことです。二人は室を一緒にして森川町の下宿屋に居りました。

とかたられております。夜はやくねて、呉先生におこされたがおきずにいたら、翌朝、ゆうべきたのは森鷗外先生だったのに、と呉先生にしかられたのも、この森川町の下宿でのことでした。こちらは、野口方の第一森川町時代にたいし、第

二森川町時代とよぶことにしましょう。白山前町、弥生町の記載の欄外に、「明治廿三年此頃ヨリ医史ヲ編マント思フ」とあることも、注目しておかなくてはなりません。

呉先生の宿舎のことはこのあと一八九一年（明治二四年）になり、「一月廿六日、午後五時本郷四丁目二十九番地本間好兼方へ転寓」とあり、本郷釘店の本間がこれであることがわかります（呉先生は前年一月一七日に医科大学を卒業しております）。この記載の前後には、中野氏をでたこと、土肥先生をおとすれたこと、増田知正のきたことがでています（『自紀資料一』には残念ながら富士川先生の来訪はかいてありません、だいたい、自分が訪問したことはするしても、訪問をうけたことはほとんどしるされず、森林太郎来訪もでてきません）。

こうしてみますと、白山前町からうつった森川町がでてこないのですが、この記載は途中から精疎がはげしくて、おおきな打撃となる事件のあと一年をこえてとだえることもあります。ところで、富士川先生の「五洋先生を憶ふ」（『藤浪先生追悼録』人文書院、京都、一九三五年）、五洋は藤浪の号ですが、ここには、

私が五洋先生を始めて知つたのは、博士がまだ東京の医科大学の一年生であった頃に、呉芳溪君と共に市川の方へ遠足するとて、本郷の街を潤歩して居られたその街上で、芳溪君から紹介せられた時であつた。

とありますのは、一八九一年でしょうか。^(二) 富士川先生がたずねたのは、森川町で藤浪が呉先生と同宿していた第二森川町時代でないことがわかります。

全体がピッチリとは整合しませんが、呉先生の下宿は、

森川町五一番地野口方——西片町一〇番地石原方（土肥と同宿、ついで藤浪と同宿）——白山前町四八番地石原方
（藤浪と同宿）——森川町（藤浪と同宿）——弥生町三番地……本郷四丁目二九番地本間好兼方

とうつております。そこで、呉先生がはじめ森川町五一番地にいた一八八八年（明治二年）一月末から翌年一月二四日までのあいだに富士川先生が呉先生をたずねていることは、ほぼたしかです。このとき土肥先生が呉先生と同宿して

いた可能性はすくなくとみますと、土肥先生は西片町一〇番地石原方で富士川先生とあっている。それは一八八九年一月二五日から四月二七日までのことになります。呉先生か富士川先生かが西片町もだしてよいところですが、呉先生が森川と釘店とをだしているのは、最初の出会いとしばしばの出会いとをあげているのでしよう。本郷四丁目二九番地本間好兼方へは富士川先生が呉先生を足しげくたずねられた、と、おもわれます。

呉先生の兄文聰は広島県出身者の会の世話をしており、呉先生もその会へ出席されたことは『自紀資料一』にも記載されております。富士川・呉両先生がこの会で直接であった可能性は絶無ではないとしても、両先生がそうはいっておられないので、富士川先生が呉文聰に紹介されて呉秀三先生をたずねたのだろうとかんがえております。

当時の地図を現在のものとかさねあわせてみますと、森川町五一番地は本郷六丁目二番地のあたり、西片町一一番地はかなりひろいのですが現在の西片一丁目五、六、一〇、一一番地ぐらい、白山前町四八番地は現在白山五丁目三一番地で白山神社の手前にあたります。本郷四丁目二九番地は、本郷五丁目一番地ですが、本郷通に面するほうでない裏通りに面しているほうです。おそらく、古書の木村書店が前あったところの裏あたりでしょう。釘店という名称の由来はまだたしかめておりません。

ところで富士川先生は、「歴史學者として關場理堂博士」(『醫事公論』第一四一五号、一九三九年)に、

私が關場博士と相知つたのは博士が東京大学に学生とて籍を置かれた時代で、同じく医科の学生であつた呉秀三、土肥慶藏の両博士と共に会して医史学上の問題について意見を闘はした事も度々であつた。四人とも同じく慶応年間の生れで、ひとり土肥博士は一年下であつたが、關場博士は呉博士及び私と同年であつた。

とかいておられます。富士川先生は呉・土肥両先生の西片町時代にあわれたのでしうか。

ここで、東京大学医学部、帝国大学医科卒業生のうちで医学史探究にとくに尽力された人をひろつてみますと、

一八八一年森林太郎、一八八三年河本重次郎、一八八八年入澤達吉、一八八九年關場不二彦、一八九〇年呉秀三・土

肥慶藏・増田知正、一八九五年藤浪鑑、一八九七年小川劍三郎、一九〇二年小川政修

があがってきまして、入澤、關場、呉、土肥、増田と一八八八年、八九年、九〇年の卒業にとくに集中しております。

富士川先生はさきほどの「醫史學者としての關場理堂博士」のはじめに、西洋崇拜にかたむいていた明治二一、二年の頃に關場博士が「心を医史学に潜めて研究に心がけて居られたのは、まことに驚嘆すべき事であると言はねばならぬ」とかいておられます。もっぱらヨーロッパにむいていた医学界の目がわが国にもどりましたのが、いまあげた先達の頃であったと解すべきなのでしょう。富士川、呉という同年同郷でしかもおなじ学問をころぞす人があったというだけではない、世の勢いがそこにあったのです。こうしてみますと、關場不二彦という人についてももうすこしさぐっていく必要を感じます。

なお、『日本産科叢書』の一番はじめに名をあげられております増田知正は卒業後産婦人科学を専攻し、のち駿河台に濱田病院を経営してりましたが、呉先生留学中の一八九九年七月二五日になくなっております。

両先生の出会いについてはまえに報告したことの繰り返しで、これにだいぶ時間をとりましたが、わが国の医史学にとってこの出会いがもつ意義からして、この繰り返しはおゆるしいただけるものとかんがえます。

三

さて、両先生が協力して仕事された分野は、医史学だけでなく、芸備医学会および精神神経学の両分野もあります。芸備医学会については、両先生ともにその郷里広島県をひじょうに大事にされていたという点を指摘するにとどめさせていただきます。

精神神経学はもちろん呉先生の専門分野ではありませんが、富士川先生も神経学を専攻されたことは、さきほど指摘したとおりであります。富士川先生は、呉先生が三浦謹之助とともに創立した日本神経学会の評議員をされる、三宅鏡一と三

名の共著『教育病理學』があるだけでなくて、日本神経学会創立とおなじ一九〇二年（明治三十五年）に日本児童研究会を創立し、『児童研究』をその機関誌としました。『教育病理學』も日本児童研究会編集となっており、呉先生の日本神経学会宿題報告の要旨「白癡に就て」が『児童研究』第二〇巻にのつたりもしております。日本児童研究会は日本児童学会と改称され、富士川先生は後年この幹事長にもなられました。先生はこの学会にだいぶ力をそがれたようで、あるとき某大臣の招宴をこわってこの学会の報告に耳をかたむけておられたということでもあります。わが国の小児精神医学あるいは児童精神医学の発達をかんがえるとき、富士川先生のお仕事はその重要な何ページかをしめるべきものであります。この点は十分な照明をあてられていないようであります。ことにこの日本児童研究会は、精神病学、教育学、小児科学などもふくむ学際的なものであったことは注目すべきでしょう。

一九一三年の犯罪学協会は、「犯罪及犯罪人ニ就キ學術的研究ヲナシ法律、社会、教育及医学等ノ諸方面ニ貢献スルヲ以テ目的」として、片山國嘉、呉、富士川、三宅、花井卓藏、牧野英一などの発起で設立されたもので、事務局は両先生の同郷の医師で司法精神病学を専攻した杉江董がになっておりました。この協会のその後の活動についてはまだたしかめておりません。

さて、医史学の面にもどりまして、富士川先生は「日本醫學史叢書」に、

殊ニ同郷ノ畏友医学博士呉秀三君ハ、余ニ先ダチテ我邦ノ医史学ヲ研究シ、已ニ得ル所アリテ一部ノ稿ヲ脱セシガ、任ニ東京医科大学教授ニ就クニ及ビテ、復タ力ヲ医史学ニ専ニスルコトヲ得ザルヲ以テ、君ガ嘗テ辛苦シテ蒐集セラレタル史料ヲ挙ゲテ、悉ク之ヲ余ニ交附シ以テ大ニ余ガコノ業ヲ助ケラレタリ、特ニ記録シテ同君ノ厚誼ヲ謝ス

とかかれております。ご自分が編史の志望を断念して富士川先生にわたされたものが大著『日本醫學史』にみのつたことを、呉先生はどんな感慨をもつてむかえられたのでしょうか。

資料二 両先生の共著

(カッコ内は主として仕事した人)

- 一八九三 「木骨考」、『日本醫籍攷』(富士川)
 - 一八九五 増田知正と共選『日本産科叢書』(呉)
 - 一八九五、九六 「日本醫人譜」、『醫史料』(富士川)
 - 一八九六 「痘史」、『星野良悦先生』
 - 一九〇一 「名醫金石文集」
 - 一九〇五、〇六 土肥慶藏と共選『日本醫學叢書』(呉)
 - 一九一〇 三宅鑽一との共著『教育病理學』
 - 一九一八 『東洞全集』(呉)
 - 一九二五 『日本醫學歴史資料目録』
- このほかに土肥慶藏と『支那醫學史』の計画

両先生の共著は資料二にあげたとおりで、そのなかにはもっぱら富士川先生によるもの、呉先生によるものがあつたことは、「故醫學博士呉秀三君」(『中外醫事新報』第一一八二号、一九三二年)に富士川先生がのべておられます。また土肥先生と三名で『支那醫學史』の企画があつたことは土肥先生から富士川先生への手紙(『芳翰帖』富士川英郎、鎌倉市、一九七二年、の79番)にみられます。呉先生遺品のなかに、中国医学史についての切り抜き、書き抜きがかなりありまして、そのなかに富士川先生による「支那醫史稿」もはいつておりました(これは展示してあります)。お名前ははいつておりませんが、字はお父様のものであると英郎先生にみていただきました。和紙一〇枚で、内容は伏羲氏にはじまり、漢にいつております。

また呉先生が執筆にさいし、富士川先生に資料のことなどいろいろたずねたり、史料をかりたりしていることも、のこされてゐる富士川先生あての手紙(『芳翰帖』)にみられるとおりです。

(四)

いままでもうしあげた三分野にくわえて、両先生が直接協力されることはなかったが、両先生がともに力をつくされた四分野のあることを、さらに指摘しておかなくてはなりません。その第一は社会医学部門です。吳先生の精神病学者としての仕事のなかでは、今日の社会精神医学に相当するものが最大の比重をしめております。富士川先生も社会医学、社会病理学についていくつかの論文を書いておられます。しかも「社会」というだけで胡散くさくみられる時代でありました。つぎは医学統計でありまして、吳先生に『醫學統計論』の先駆的訳業があり、また樫田五郎との共著「精神病者私宅監置ノ實況」に「及び其統計的觀察」とついていることは、皆様ご存じのことです。富士川先生にも医学統計論の論文があり、統計をあつかったものもかかれております。第三は、まえに報告したことがあります（「日本における精神病学用語の変遷」『精神神経学雑誌』第九〇号第七号、一九八八年）が、学術用語について両先生はいくつかの提案をされておられます。第四には、今日いう医事法学的な面への両先生の関心があります。これらの点は、両先生がわが国の医学をきりひらいていくにあたって、同方向の、ひろい、いわば今日的な認識をもっておられたことを、しめしております。

四

吳秀三先生没後五〇年記念会の夕食会で富士川英郎先生（「吳先生御一家と私たち」『吳秀三先生没後五〇年記念会誌』、吳秀三先生没後五〇年記念会・東京、一九八三年）は、

いま申したとおり吳先生と父との交友は四〇年にあまる永い関係でございますが、いま考えて、私は吳先生を直接にはあまりよく存じあげておりませんが、よくもまあこの二人が四〇年も一度も喧嘩をしないで親交を続けてきたものだという感想を強く持つのであります。

とはなされました。まったくそのとおり。極言すれば、分裂気質と類てんかん気質と両先生の気質はかなりちがっても、

強情さという点は両先生共通しておりました。呉先生のわかい頃の激しさは、中年からはおさえられてはいたものの、晩年にも爆発することがあったように感じております。^(五) 両先生をむすびつづけるものが数おおくあったとはいえ、四三年あまりの友情がそうかわらずつづくというのは、なみなみならぬことでありました。下種が勤ぐれば両先生の胸中をさまざまにかんがえてみることも、できなくはありません。ここは、富士川先生が呉先生をたてられたことによる面がおおくあつたろうことは、想像にかたくありません。

わたしたちの日本医史学会は、一八六五年前後にうまれた、土肥先生をふくむ諸先達の交友、なかでも富士川游・呉秀三両先生の四三年にあまる友情を通じてうまれ、そだったものである、——この点をまず再確認させていただきます。両先生の最初の出会いからすでに一〇二年ちかく、日本医史学会が日本医学会の第一分科会としてあることはご同慶の至りではありますが、医学史研究の現状はどうか。

わが国に医史学の完全な講座が一つもないのはご承知のとおりであります。これは医学界一般の無理解によるとなげいでいることもできません。他方、諸文献に医学史に関する記述がふえているとはいえ、そのなかにはひどい誤りがしばしば見られます。しかもそれにはたいし、医学史をおさめているものの批判もあまりに手ぬるいし、^(六) 誤りを公認するにちかいいこともあるようにおもいます。相互批判もふくめてわたしたちが批判の目をもつとするべくもつことも要求されております。

わたしたちがいろいろな面でもっとも努力をつよめなくては、富士川・呉両先生をはじめとする諸先達の学恩にこたえることはできません。

「吾人〔中略〕ハ自ラ省ミテ、吾人ノ熱心・努力ノ未ダ足ラザルモノアルニ忸怩タラズンバアルベカラズ」。これは呉先生が「精神病者私宅監置ノ實況及ビ其統計的觀察」(『東京醫學會雜誌』第三卷第一三号、一九一八年)の結びのほうにのべておられることですが、この引用をもつて報告をおわらせていただきます。

これは一九〇年一月七日の富士川游先生没後五〇年記念会における報告を、スライド部分をのぞいて、ほぼそのまま再現したものである。

注

(一) 正確に言えば、呉先生が生まれた二月一七日は元治二年で、元治二年四月七日に慶応元年と改元されている。

(二) 藤浪鑑(一八七〇～一九三二)は、一九〇〇年京都帝国大学医科大学教授に任ぜられた。一九〇七年(明治四〇年)五月一八～二〇日の京都医学会第四次総会にさいしては、藤浪が中心になって医史材料陳列がなされ、そのさい富士川先生の助言をえている。五洋生「京都醫學會第四次總會誌ノ後ニ記ス」(「京都醫學會第四次總會誌」『京都醫學雜誌』第四卷附録)は、医史材料陳列をみて「骨折損ノ草臥儲」だけといった人があることにいかり、徹頭徹尾模倣医学・輸入医学であるわが国医学の現状をきびしく指摘し、歴史認識を通じて日本医学を確立すべきことをはげしくうたった(これは、現在再評価さるべき大文章である)。富士川先生は二年後一九〇九年五月一六日の第六次総会で「西洋醫學ノ輸入」の講演をされた(内容は、『京都醫學雜誌』第七卷第一号、一九一〇年)。京都帝国大学と富士川先生との結びつきは藤浪を介するものであったし、その淵源は一八九一年本郷街上における出会いであったのである。また、一九四〇～四二年と日本医史学会理事長をした藤浪剛一は、鑑の弟である。

(三) 呉先生は「日本醫學史の序」に、「余は前に文学の研究を思ひ止まつたと同じく其後又今も専門とする精神病学にて学問上の興味を加へたるに従つて次第に医史的研究の方には遠ざかつて来た」、「余が中途に思ひ切つた所の我邦の太古よりの医史」とのべ、さらに『醫聖堂叢書』(呉秀三・東京、一九二三年)の「序」に、

余嘗テ我邦医学歴史ニ多大ノ興味ヲ抱キ。初ニハ之ガ編纂ニモ当ランカト思ヒシコトアリ。ソノ材料トナルベキモノヲ蒐集セシコト一日ニアラス。(中略)然ルニ其後志望ヲ編纂ニ絶テタルヨリ、此等ノ図書ハ大抵之を放擲シ揮散シテ残ス所今ヤ尠少トナリタレドモ。肖像手蹟及ビ余ガ専門科ニ関スル書籍ハ猶ホ之ヲ手元ニ留メ置キタリ。

とかいている。富士川文庫には、呉先生から富士川先生におくられたものがかなりあるはずである。「呉氏文庫印」、「呉氏蔵書之印」のあるものが富士川文庫本に実際どのくらいあるだろうか。また、東京大学医学図書館所蔵呉秀三文庫中の「郡山樓所蔵醫書目録」(内表紙には「以呂波別呉氏醫書目録 杜溪書院」とある、「郡山樓」、「杜溪書院」はともに呉先生書齋名、おそらく留学前の呉先生自筆)の内容と富士川文庫との照合もされるべきだろう。

(四) 東京大学医学図書館所蔵吳秀三文庫には、「富士川家蔵本」の印あるものが五冊あり、うち二冊は「吳氏蔵書之印」をけしてあり、ほかにも吳先生遺品中に「富士川家蔵本」の印あるものがある。

(五) 精神病学教室の拡張について吳先生が青山胤通医科大学長にたいしなぐりかからんばかりになったことは、近藤次繁(「吳秀三先生を偲ぶ夕」『日本醫事新報』第八六九号、一九三九年)がかたっている。また、一九二四年新設の北海道帝国大学医学部の助教授(精神病学担当)となった久保喜代二が間もなくそこをおわたるときに、吳先生がはげしい怒りをしめたことがつたえられている。

(六) たとえば、『日本醫史學雜誌』における本の紹介でも、すいぶんとまよいものがみられる。

(精神科医療史研究会)

Dr. Fujikawa Yū and Dr. Kure Shūzō: their friendship and the study of Medical History

by Yasuo OKADA

Dr. Fujikawa Yū (1865~1940) and Dr. Kure Shūzō (1865~1932) were born in the same year and came from the same prefecture, Hiroshima. Since their student days both had serious intentions to study the medical history of Japan. Their first meeting must have occurred at the end of 1888 or at the beginning of 1889. In 1892, Fujikawa and Kure began serious study on medical history. By this time, Japanese medicine had begun to stand on its own feet. But only few colleagues of them took interest in the medical history of Japan.

In the years that followed, Dr. Kure became busy as a leading psychiatrist, and had given up his attempts at compiling a complete history on Japanese medicine. In 1904, Dr. Fujikawa did succeed in compiling a comprehensive history of Japanese medicine. In his later years Dr. Kure resumed his work

on medical history. Finally, in 1927 Drs. Fujikawa and Kure founded the Japan Society of Medical History. Dr. Kure was elected the chief director.

Their warm friendship lasted for more than forty years. The study of the medical history in Japan grew out of their friendship and cooperation. Remembering these two eminent pioneers, it is unfortunate that the Japanese medical community of today still takes such little interest in medical history.